

虹の絵具皿

(十力の金剛石)

宮沢賢治

青空文庫

むかし、ある霧きりのふかい朝でした。

王子はみんながちよつといなくなつたひまに、玻璃はりでたたんだ自分のお室へやから、ひよいつと芝生しばふへ飛びとおりました。

そして蜂はちすずめ 雀すずめのついた青い大きな帽子ぼうしを急いそいでかぶつて、どんどん向むこうへかけ出しました。

「王子さま。王子さま。どちらにいらつしやいますか。はて、王子さま」

と、年よりのけらいが、室へやの中であつちを向むいたりこつちを向むいたりして叫さけんでいるようにうすでした。

王子は霧きりの中で、はあはあ笑わらつて立ちどまり、ちよつとそちを向むきましたが、またすぐ向むき直なおつて音をたてないように剣つるぎのさやをにぎりながら、どんどん大臣だいじんの家の方へかけました。

芝生しばふの草はみな朝の霧きりをいっばいに吸すつて、青く、つめたく見えました。

大臣だいじんの家のくるみの木が、霧きりの中から不意ふいに黒く大きくあらわれました。

その木の下で、一人の子供ひとこの影かげが、霧きりの向むこうのお日様ひさまをじつとながめて立っていました

た。

王子は声をかけました。

「おおい。お早う。遊びに来たよ」

その小さな影はびつくりしたように動いて、王子の方へ走って来ました。それは王子と同じ年の大臣の子でした。

大臣の子はよろこんで顔をまっかにして、

「王子さま、お早うございます」と申しました。

王子が口早にききました。

「お前さつきからここにいたのかい。何してたの」

大臣の子が答えました。

「お日さまを見ておりました。お日さまは霧がかからないと、まぶしくて見られません」

「うん。お日様は霧がかかると、銀の鏡のようだね」

「はい、また、大きな蛋白石の盤のようでございます」

「うん。そうだね。僕はある大きな蛋白石があるよ。けれどもあんなに光りはしない

よ。僕はこんど、もっといいのをさがしに行くんだ。お前もいつしよに行かないか」

大臣だいじんの子はすこしもじもしました。

王子はまたすぐ大臣だいじんの子にたずねました。

「ね、おい。僕ぼくのもつてるルビーの壺つぼやなんかより、もつといい宝石ほうせきは、どっちへ行つたらあるだろうね」

大臣だいじんの子が申しました。

「虹にじの脚あしもとにルビーの絵えの具皿ぐざらがあるそうです」

王子が口早くばいに言いました。

「おい、取りとに行こうか。行こう」

「今すぐでございますか」

「うん。しかし、ルビーよりは金剛石こんごうせきの方がいいよ。僕ぼく黄色こんごうせきな金剛石こんごうせきのいいのを持ってるよ。そして今度はもつといいのを取とつて来るんだよ。ね、金剛石こんごうせきはどこにあるだろうね」

大臣だいじんの子が首くびをまげて少し考えてから申しました。

「金剛石こんごうせきは山の頂上ちようじようにあるでしょう」

王子はうなずきました。

「うん。そうだろうね。さがしに行こうか。ね。行こうか」

「王さまに申し上げなくてもようございますか」と大臣だいじんの子が目をパチパチさせて心配しんぱそうに申しました。

その時うしろの霧きりの中から、

「王子さま、王子さま、どこにいらつしやいますか。王子さま」

と、年とつたけらしいの声が聞こえて参まいりました。

王子は大臣だいじんの子の手をぐいぐいひっぱりながら、小声で急いそいで言いいました。

「さ、行こう。さ、おいで、早く。追おいつかれるから」

大臣だいじんの子は決心けっしんしたように剣つるぎをつるした帯革おびがわを堅かたくしめ直なおしながらうなずきました。

そして二人は霧きりの中を風よりも早く森の方へ走って行きました。

＊

二人はどんどん野原の霧きりの中を走って行きました。ずうつとうしろの方で、けらいたちの声がまたかすかに聞こえました。

王子はあはあ笑いながら、

「さあ、もう少し走ってこう。もう誰も追いつきやしないよ」

大臣だいじんの子は小さな樺かばの木の下を通るとき、その大きな青い帽子ぼうしを落おとしました。そして、あわててひろってまた一生けん命めいに走りました。

みんなの声ももう聞こえませんでした。そして野原はだんだんのぼりになってきました。二人はやつと馳かけるのをやめて、いきをせかせかしながら、草をばたりばたりと踏ふんで行きました。

いつか霧きりがすうつとうすくなつて、お日さまの光が黄金色きんいろに透すきつてきました。やがて風が霧きりをふつと払いはらいましたので、露つゆはきらきら光り、きつねのしつぽのような茶色の草穂くさぼはいちめんなみ一面波を立てました。

ふと気がつきますと遠くの白樺しらかばの木のこちらから、目もさめるような虹にじが空高く光つてたっていました。白樺しらかばのみきは燃えるばかりにまっかです。

「そら虹にじだ。早く行つてルビーの皿さらを取ろう。早くおいでよ」

二人はまた走り出しました。けれどもその樺かばの木に近づけば近づくほど美しい虹にじはだんだん向むこうへ逃にげるのでした。そして二人が白樺しらかばの木の前まで来たときは、虹にじはもうどこへ行つたか見えませんでした。

「ここから虹は立ったんだね。ルビーのお皿が落ちてないか知らん」

二人は足でけむりのような茶色の草穂をかきわけて見ましたが、ルビーの絵の具皿はそこに落ちていませんでした。

「ね、虹は向こうへ逃げるときルビーの皿もひきずって行ったんだね」

「そうだろうと思います」

「虹はいったいどこへ行つたろうね」

「さあ」

「あ、あすこにいる。あすこにいる。あんな遠くにいるんだよ」

大臣の子はそつちを見ました。まつ黒な森の向こう側から、虹は空高く大きく夢の橋をかけていたのです。

「森の向こうなんだね。行ってみよう」

「また逃げるでしょう」

「行ってみようよ。ね。行こう」

二人はまた歩き出しました。そしてもう柏の森まで来ました。

森の中はまっくらで気味が悪いようでした。それでも王子は、ずんずんはいつて行きま

した。小藪こやぶのそばを通るとき、さるとりいばらが緑みどりいろ色のたくさんのかぎを出して、王子の着物きものをつかんで引き留めようとしました。はなそうとしてもなかなかはなれませんでした。

王子はめんどくさくなったので剣つるぎをぬいていきなり小藪こやぶをばらんと切ってしまいました。

そして二人はどこまでもどこまでも、むくむくの苔こけやひかげのかずらをふんで森の奥おくの方へはいつて行きました。

森の木は重かさなり合つてうす暗ぐらいでしたが、そのほかにどうも空まで暗くらくなるらしいのでした。

それは、森の中に青くさし込こんでいた一本の日光の棒ぼうが、ふっと消きえてそこらがぼんやりかすんできたのでもわかりました。

また霧きりが出たのです。林の中はまもなくぼんやり白くなつてしまいました。もう来た方がどつちかもわからなくなつてしまったのです。

王子はためいきをつきました。

大臣だいじんの子もしきりにあたりを見ましたが、霧きりがそこらいつぱいに流れ、すぐ眼めの前の

木だけがぼんやりかすんで見えるだけです。二人は困^{こま}ってしまつて腕^{うで}を組んで立ちました。すると小さなきれいな声で、誰^{だれ}か歌いだしたものがあります。

「ポツシヤリ、ポツシヤリ、ツイツイ、トン。

はやしのなかにふる霧^{きり}は、

蟻^{あり}のお手玉、三角^{さんかくぼうし}帽子の、一寸法師^{いっすんぼうし}のちいさなけまり」

霧^{きり}がトントンはね踊^{おど}りました。

「ポツシヤリ、ポツシヤリ、ツイツイ、トン。

はやしのなかにふる霧^{きり}は、

くぬぎのくろい実^み、柏^{かしわ}の、かたい実^みのつめたいおちち」

霧^{きり}がポシヤポシヤ降^ふってきました。そしてしばらくしんとしました。

「誰^{だれ}だろう。ね。誰^{だれ}だろう。あんなことうたってるのは。二、三人のようだよ」

二人はまわりをきよろきよ見ましたが、どこにも誰だれもいませんでした。
 声はだんだん高くなりました。それはじょうずな芝しば笛ふえのように聞こえるのでした。

「ポツシャリ、ポツシャリ、ツイ、ツイ、ツイ。

はやしのなかにふるきりの、

つぶはだんだん大きくなり、

いまはしずくがポタリ」

霧きりがツイツイツイ降ふってきて、あちこちの木からポタリッポタリッと雪しずくの音がきこえてきました。

「ポツシャン、ポツシャン、ツイ、ツイ、ツイ。

はやしのなかにふるきりは、

いまにこあめにかあわるぞ、

木はあみんな 青あお外が套とう。

ポツシャン、ポツシャン、ポツシャン、シャン」

きりはこあめにかわり、ポツシャンポツシャン降^ふつてきました。大臣^{だいじん}の子は途^と方^{ほう}に暮^くれたように目をまんまるにしていました。

「誰^{だれ}だろう。今のは。雨を降^ふらせたんだね」

大臣^{だいじん}の子はぼんやり答えました。

「ええ、王子さま。あなたのきものは草の実^みでいっぱいですよ」そして王子の黒いびろうどの上着^{うわぎ}から、緑^{みどり}色のぬすびとはぎの実^みを一ひらずとりました。

王子がにわかに叫^{さけ}びました。

「誰^{だれ}だ、今歌ったものは、ここへ出る」

するとおどろいたことは、王子たちの青い大きな帽子^{ぼうし}に飾^{かぎ}つてあった二羽^わの青びかりの蜂^{はち}雀^{すずめ}が、ブルルブルツと飛^とんで、二人^{ふたり}の前に降^おりました。そして声をそろえて言^いいました。

「はい。何かご用でございますか」

「今の歌はお前たちか。なぜこんなに雨をふらせたのだ」

蜂はちすずめ 雀すずめ はじょうずな芝しば笛ふえのように叫さけびました。

「それは王子さま。私だいじどもの大事だいじのご主人しゅじんさま。私だいじどもは空をながめて歌っただけでございます。そらをながめておりますと、きりがあめにかわるかどうかよくわかったの
でございます」

「そしてお前らはどうして歌ったり飛とんだりしたのだ」

「はい。ここからは私あんないどもの歌ったり飛とんだりできる所ところになつていたのでございます。ご案内あんないいたしましょう」

雨はポツシャンポツシャン降ふつています。蜂はちすずめ 雀すずめはそう言いいながら、向むこうの方かたへ飛とび出でしました。せなかや胸むねに鋼鉄こうてつのはり金かねがはいっているせいか飛とびようがなんだか少し変へんでした。

王子たちはそのあとをついて行きました。

*

にわかにあたりがあかるくなりました。
今までポシャポシャやっていた雨きゅうが急おつづに大粒おおつぶになつてぎあぎあふと降ふつてきたのです。
はちすずめが水の中の青い魚のように、なめらかにぬれて光りながら、二人ふたりの頭の上を

せわしく飛びめぐって、

ザッ、ザ、ザ、ザザアザ、ザザアザ、ザザア、

ふらばふれふれ、ひでりあめ、

トパアス、サファイア、ダイヤモンド。

と歌いました。するとあたりの調子がなんだか急に変わりました。雨があられに変わってパラパラパラやってきたのです。

そして二人はまわりを森にかこまれたきれいな草の丘の頂上に立っていました。

ところが二人は全くおどろいてしまいました。あられと思ったのはみんなダイヤモンドやトパアスやサファイアだったのです。おお、その雨がどんなにきらびやかなまぶしいものだったでしょう。

雨の向こうにはお日さまが、うすい緑色のくまを取って、まっ白に光っていました。が、そのこちらで宝石の雨はあらゆる小さな虹をあげました。金剛石がはげしくぶつかり合っては青い燐光を起しました。

その宝^{ほう}石^{せき}の雨は、草に落^おちてカチンカチンと鳴りました。それは鳴るはずだったので
 す。りんどうの花は刻^きま^ぎれた天^{アマ}河^{ゾン}石^{ストーン}と、打^うち^く劈^だかれた天^{アマ}河^{ゾン}石^{ストーン}で組^キみ^ツ上^ツがり、その
 葉^ははなめらかな硅^{クリ}孔^ソ雀^コ石^ラでできていました。黄色な草^く穂^さはか^かが^がや^やく猫^キ睛^ツ石^ツ、いちめんの
 うめばちそうの花^{はな}びらはか^かす^すかな虹^にを^じ含^ふむ乳^ち色^ちの蛋^{たん}白^{ぱく}石^{せき}、とうやくの葉^はは碧^へ玉^ぎ、
 そのつぼみは紫^{アメ}水^シ晶^{スト}の美^うし^もい^もさ^もき^もを^も持^もつ^もて^もい^もま^もし^もた^も。そしてそれらの中^なで^ない^なち^なば^なん^な立^り派^{っぱ}
 なのは小^こさ^さな野^のば^のらの木^きで^でし^した^た。野^のば^のらの枝^えは茶^ち色^しの琥^こ珀^{はく}や紫^{むら}が^さか^さつ^さた霰^{アラ}石^{ゴナイト}で^でみ^みが^がき
 あ^あげ^げら^られ^れ、そ^その^の実^みはま^まつ^つか^かなル^ルビー^{ビー}で^でし^した^た。
 もしそ^その^の丘^{おか}をつ^つく^くる黒^{くろ}土^{つち}を^をた^たず^ずね^ねる^るな^なら^らば、そ^それ^れは緑^{ろく}青^{しょう}か瑠^る璃^りであ^あつ^つた^たに^にち^ちが^がい^いあ
 り^りま^ません。二^ふ人^{たり}はあ^あき^きれ^れて^てぼ^ぼん^んや^やり^りと光^{ひかり}の雨^{あめ}に^に打^うた^たれ^れて^て立^たち^ちま^まし^した^た。
 は^はち^ちす^すず^ずめ^めが^がた^たび^びた^たび宝^{ほう}石^{せき}に^に打^うた^たれ^れて^て落^おち^ちそ^そう^うに^にな^なり^りな^なが^がら、^らや^やは^はり^りせ^せわ^わし^しく^くせ^せわ^わし^し
 く飛^とび^びめ^めぐ^ぐつ^つて、

ザツザザ、ザザアザ、ザザアザザア、
 降^ふらば^ふれ^れふ^ふれ^れひ^ひで^でり^りあ^あめ
 ひ^ひか^かり^りの^の雲^{うみ}の^のた^たえ^えぬ^ぬま^まま。

と歌いましたので雨の音はひとしお高くなり、そこらはまたひとしきりかがやきわたりました。

それから、はちすずめは、だんだんゆるやかに飛んで、

ザツザザ、ザザアザ、ザザアザザア、

やまばやめやめ、ひでりあめ

そらは　みがいた　土耳古玉。

と歌いますと、雨がぴたりとやみました。おしまいの二つぶばかりのダイヤモンドがそのみがかれた土耳古玉トルコだまのそらからきらきらつと光って落ちました。

「ね、このりんどうの花はお父さんの所のところ一等のコップよりも美しいんだね。トパアスがいつぱいに盛もつてあるよ」

「ええ立派りっぱです」

「うん。僕ぼく、このトパアスをはんけちへいつぱい持もつてこうか。けれど、トパアスよりは

ダイヤモンドの方がいいかなあ」

王子ははんけちを出してひろげましたが、あまりいちめんきらきらしているのもう
 なんだか拾うのがばかげているような気がしました。

その時、風が来て、りんどうの花はツアリンとからだを曲げて、そのアマゾンストーンの花の
 盃を下の方に向きましたので、トパスはツアラツアランとこぼれて下のすずらの葉に
 落ち、それからきらきらがって草の底の方へもぐって行きました。

りんどうの花はそれからギギンと鳴って起きあがり、ほっとため息をして歌いました。

「トパスのつゆはツアランツアリリン、

こぼれてきらめく サング、サンガリン、

ひかりの丘に すみながら

なあにがこんなになしかる」

まっ碧な空では、はちすずめがツアリル、ツアリル、ツアリルリン、ツアリル、ツア
 リル、ツアリルリンと鳴いて二人とりんどうの花との上をとびめぐっております。

「ほんとうにりんどうの花は何がかなしいんだろうね」王子はトパアスを包もうとして、一ぺんひろげたはんけちで顔の汗をふきながら言いました。

「さあ私にはわかりません」

「わからないねい。こんなにきれいなんだもの。ね、ごらん、こっちのうめばちそうなどはまるで虹のようだよ。むくむく虹が湧いてるようだよ。ああそうだ、ダイヤモンドの露が一つぶはいつてるんだよ」

ほんとうにそのうめばちそうは、ぷりりぷりりふるえていましたので、その花の中の一つぶのダイヤモンドは、まるで叫び出すくらいに橙や緑に美しくかがやき、うめばちそうの花びらにチカチカ映って言いようもなく立派でした。

その時ちようど風が来ましたので、うめばちそうはからだを少し曲げてパラリとダイヤモンドの露をこぼしました。露はちくちくつとおしまいの青光をあげ碧玉の葉の底に沈んで行きました。

うめばちそうはブリリンと起きあがってもう一ぺんサツサツと光りました。金剛石の強い光の粉がまだはなびらに残ってでもいたのでしょうか。そして空のはちすずめのめぐりも叫びも、にわかにはげしくはげしくなりました。うめばちそうはまるで花びらも夢も

はねとばすばかり高く鋭く叫びました。

「きらめきのゆきき」

ひかりのめぐみ

にじはゆらぎ

陽は織れど

かなし。

青ぞらはふるい

ひかりはくだけ

風のきしり

陽は織れど

かなし」

野ばらの木が赤い実から 水晶の雫をポトポトこぼしながらしずかに歌いました。

「にじはなみだち
きらめきは織^おる
ひかりのおかの
このさびしさ。

こおりのそのの
めくらのさかな
ひかりのおかの
このさびしさ。

たそがれぐもの
さすらいの鳥
ひかりのおかの
このさびしさ」

この時光の丘おかはサラサラサラツと一めんけはいがして草も花もみんなからだをゆすつた
 りかがめたりきらきら宝ほう石せきの露つゆをはらいギギンザン、リン、ギギンと起おきあがりました。
 そして声をそろえて空高く叫さけびました。

「十じゅう力りきの金剛石こんごうせきはきようも来きず

めぐみの宝いし石いしはきようも降ふらず

十じゅう力りきの宝いし石いしの落おちざれば、

光ひかりの丘おかも まつくろのよる

二人ふたりは腕うでを組くみんで棒ぼうのように立つていましたが王子はやっと気がついたように少しから
 だをかがめて、

「ね、お前たちは何がそんなにかなしいの」と野はばらの木にたずねました。

野のばらは赤い光の点てん々てんを王子の顔はんしやに反はん射しゃさせながら、

「今いま言いった通りです。十じゅう力りきの金剛石こんごうせきがまだ来きないのです」

王子は向むこうの鈴蘭すずらんの根ねもとからチクチク射さして来る黄金色きんいろの光をまぶしそうに手でさえぎりながら、

「十力じゅうりきの金剛石こんごうせきってどんなものだ」とたずねました。

野のばらがよろこんでからだをゆすりました。

「十力じゅうりきの金剛石こんごうせきはただの金剛石こんごうせきのようにチカチカうるさく光りはありません」

碧へきぎ玉よくのすずらんが百の月が集あつまった晩ばんのように光りながら向むこうから言いいました。

「十力じゅうりきの金剛石こんごうせきはきらめくときもあります。かすかににごることもあります。ほのかにうすびかりする日もあります。あるときは洞穴どうけつのようにまっくらです」

ひかりしずかな天アマゾンストン河石アゾンストーンのりんどうも、もうとても踊おどりださずいられないというようにサアン、ツアン、サアン、ツアン、からだをうごかして調子ちようしをとりながら言いいました。

「その十力じゅうりきの金剛石こんごうせきは春の風よりやわらかく、ある時はまるくあるときは卵たまごがたです。霧きりより小さなつぶにもなれば、そらとつちとをうずめもします」

まひるの笑わらいの虹にじをあげてうめばちそうが言いいました。

「それはたちまち百千のつぶにもわかれ、また集あつまって一つにもなります」

はちすずめのめぐりはあまり速く^{はや}てただルルルルと鳴る^なぼんやりした青い光の輪^わにしか見えませんでした。

野^のばら^らがあまり気が立ち過ぎてカチカチしながら叫^{さけ}びました。

「十^{じゅうりき}力^{りき}の大^{だい}宝^{ほう}珠^{じゆ}はある時黒い厩^{きゅう}肥^ひのしめりの中に埋^うめます。それから木や草のからだの中で月光いろにふるい、青白いかな脈^{みやく}をうちます。それから人の子供^{こども}の苹^{りん}果^この頬^ほをかがやかします」

そしてみんながいつしよに叫^{さけ}びました。

「十^{じゅうりき}力^{りき}の金剛^{こんごう}石^{せき}は今日も来ない。

その十^{じゅうりき}力^{りき}の金剛^{こんごう}石^{せき}はまだ降^ふらない。

おお、あめつちを充^みてる十^{じゅうりき}力^{りき}のめぐみ

われらに下れ」

にわかにはちすずめがキーンとせなかの鋼鉄^{こうてつ}の骨^{ほね}もはじけたかと思うばかりするどいさけびをあげました。びつくりしてそちらを見ますと空が生き返^{かえ}ったように新しくかが

やき、はちすずめはまっすぐに二人の帽子ぼうしにおりて来ました。はちすずめのあとを追おつて二つぶの宝ほうせき石がスツと光つて二人の青い帽子ぼうしにおち、それから花の間に落おちました。

「来た来た。ああ、とうとう来た。十じゅうりき力の金剛石こんごうせきがとうとう下つた」と花はまるでとびたつばかりかがやいて叫さけびました。

木も草も花も青ぞらも一度どに高く歌いました。

「ほろびのほのお 湧わきいでて

つちとひととを つつめども

こはやすらけき くになして

ひかりのひとら みちみてり

ひかりにみてる あめつちは

.....」

きゆう

急に声こゑがどこか別の世界に行つたらしく聞こえなくなつてしまいました。そしていつか十じゅうりき力の金剛石こんごうせきは丘おかいっぱいに下つておりました。そのすべての花も葉はも茎くきも今はみ

なめぎめるばかり立派りっぱに変わっていました。青いそらからかすかなかな樂がくのひびき、光なみの波、かんばしく清きよいおおり、すきとおった風のほめことばが丘おかいちめんおかにふりそそぎました。

なぜならばずらの葉はは今ほんとうの柔やわらかなうすびかりする緑みどりいろ色の草くさだったのです。

うめばちそうはすなおな、ほんとうのはなびらをもっていたのです。そして十じゅうりき力の金剛石こんごうせきは野ばらの赤い実みの中のいみじい細胞さいぼうの一つ一つにみちわたりました。

その十じゅうりき力の金剛石こんごうせきこそは露つゆでした。

ああ、そしてそして十じゅうりき力の金剛石こんごうせきは露つゆばかりではありませんでした。碧あおいそら、かがやく太陽たいよう、丘おかをかけて行く風、花のそのかんばしいはなびらや、しべ、草のしなやかなからだ、すべてこれをのせになう丘おかや野原、王子たちのびろうどの上着うわぎや涙なみだにかがやく瞳ひとみ、すべてすべて十じゅうりき力の金剛石こんごうせきでした。あの十じゅうりき力の大宝珠だいほうじゆでした。あの十じゅうりき力の尊とうとい舍利しゃりでした。あの十じゅうりき力とは誰だれでしょうか。私はやつとその名を聞いただけでした。けれどもこの蒼鷹あおたかのように若い二人ふたりがつつましく草の上にひざまずき指ゆびを膝ひざに組くんでいたことはなぜでしょうか。

さてこの光の底のしずかな林の向こうから二人をたずねるけらいたちの声が聞こえて参りました。

「王子様王子様。こちらにおいででございますか。こちらにおいででございますか。王子様」

二人は立ちあがりました。

「おおい。ここだよ」と王子は叫ぼうとしましたが、その声はかすれていました。二人はかがやく黒い瞳を、蒼ぞらから林の方に向けしずかに丘を下って行きました。

林の中からけらいたちが出て来てよろこんで笑ってこつちへ走って参りました。

王子も叫んで走ろうとしましたが、一本のさるとりいばらがにわかにすこしの青い鉤を出して王子の足に引っかけました。王子はかがんでしずかにそれはずしました。

青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1991（平成3）年6月10日改版65版

入力：土屋隆

校正：石橋めぐみ

2007年7月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

虹の絵具皿

(十力の金剛石)

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 宮沢賢治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>